

僕はファミレスでアルバイトをしていた。一日に五時間、週に三回位。

寒い冬の日。風が強い日だった。アルバイトのあ
る日だった。そろそろ家を出ないと間に合わなく
なる時間だった。テレビをぼんやり見ていた。や
っと家を出た。ファミレスに着く。社員の人に、
急いで時間ギリギリ、と言われた。慌てて控え室
に飛び込んだ。暖房が効いていた。テーブルに、
彼女が頼杖をついていた。少し横を向いていた。
髪が、とてもとても短くなっていた。顔の印象が
かなり違っていた。僕は立ち止まった。

寒さが少し和らいで来た日。彼女の、お先に失礼
しますと言う声がした。ぼくは、声の方に振り向
いた。彼女は笑顔で僕を見ていた。僕の視線をと
らえ、促すように、ちょっと小首を傾げた。僕は
笑い返した。彼女は小さくうなずいた。

彼女は僕より少し年上だ。彼女が微笑んでいる。

僕は彼女を見つめてしまう。彼女がフロアーの時、化粧は決まっている。キッチンの時、化粧気がない。その時、彼女は子供っぽく見える。

僕は更衣室で着替えていた。更衣室は控え室に一人だけ入れるように仕切られただけの部屋だ。控え室に彼女が誰かと笑いながら入ってきた。彼女は、それで彼とはどうなの？ と訊かれた。彼女は、この前、百均でバトミントン買って、一緒にやったの、と答えた。僕ではない。僕は更衣室を出た。彼女が微笑みかけてくる。僕は彼女の瞳に捕まってしまう。顔が自然に微笑んでしまう。彼女の隣で、彼女と同期の人も、同じように僕を見詰めて微笑みかけていた。僕は気まづくになる。彼女から目をそらした。僕は黙って更衣室を出る。二人の笑い声が聞こえた。

彼女が微笑みかけてくる。僕はどうすればいいのか分からなくなる。僕はどうすればいいのか分か

らないまま彼女の前を通り過ぎる。

彼女は僕に微笑みかけてくる。僕も笑顔で答える。僕は、彼女の挨拶に答える。僕はそのアルバイトをしばらく続けた。そして、辞めた。それは、もう、何年も何年も前のことだ。

約束の時間に遅れそうになる。信号は赤だ。横断歩道の先の和菓子屋で、彼女は僕を睨みつけている。信号が変わった。彼女は、串団子と書かれたのぼりの横から駆け出す。「お父さん遅刻」。僕は怒鳴られる。

串団子を買った。店のおばさんが、串団子を薄いプラスチックの容器に詰めながら、「小学何年生？」と訊く。「3年」。串団子が容器に詰められるのをじっと見詰めながら、そう答える。おばさんは驚いたように僕を見る。「女のお子さんのの。髪が短いから男の子かと思った」。娘は僕を見て、髪を撫で付ける。

蓋はセロハンテープで止めてある。プラスチックの容器は薄い紙で包まれている。紙にはなにかの模様が印刷されている。僕は娘に串団子を渡そうとする。娘はまだ持っててと言う。和菓子屋を出る。店のおばさんが娘にバイバイと手を振る。娘は手を振って答える。土手を登る。緩やかな川の流れ。娘は僕から串団子の包みを奪い取る。包み紙を止めてあるセロテープを剥がす。ゆっくりと慎重に剥がす。包み紙はきちんとたたまれる。おばあちゃんにあげるんだ。そう呟く。土手に座り込む。団子をほおばる。空を見上げ。微笑みながら僕を見る。足をバタバタさせ靴を飛ばす。靴は土手を転げ落ちる。娘は身を乗り出す。バランスを崩しそうになる。明日も晴れだよ。そう言う。土手を川上に向かって歩く。サッカーの練習場がある。練習はもう始まっている。選手達はピッチの周りを走っている。シーズンオフ。練習が始ま

って今日で二回目位。何年かぶりでチームに戻ってきた選手も参加している。その選手がチームにいた時、僕は娘を連れて試合を観に行った事がある。同い年くらいの子は座っているのに飽きてしまい走り回った。娘はじっと試合を観ていた。ゴールが決まった。みんな、立ち上がって喜んだ。娘はみんなが慶んでいるのを見てニコニコ笑って拍手をした。

僕は土手に寝そべる。その選手が走っているのを見る。娘は先に帰ると言う。立ち上がる。土手沿いに歩き出す。咲き誇っている花の前で立ち止まる。僕を振り向く。嬉しそうに笑っている。指で花を指す。口がゆっくりと単語を綴る。さ・ざ・ん・か。僕はその花がさざんかなのか分からない。娘は怒った顔をする。

何年か振りに帰ってきた選手はほとんど話さない。彼は別メニューで調整を始める。スタッフと二人

で走り出す。僕はしばらくして、彼と一緒に走っているのが監督だと気付く。彼は他の選手に合流する。彼がボールを扱った際に、コーチが彼に声をかける。いいぞ！ そうだ！僕は彼をずっと見ている。彼と彼の仲間を。

日が暮れかかる。僕は家に戻る。ドアを開ける。妻が立っている。居間で話しましょうと妻が言う。娘が座っている。妻が、お父さんがお話があるの、と言う。僕は黙っている。妻が話し始める。お父さんとお母さんは別々の家で暮らすことになったの。娘は顔色一つ変えない。僕は黙っている。妻の声が説明している。お父さんにいろんなことがあったの。この家にとっても怖い人達が来るの。それで、お父さんは別の家で暮らして、私たちは、しばらくここに居て、新しい家が見つかったら出て行くの。妻は僕を見る。

僕は、分かるよな、分かるだろと言った。娘は、

ウンと言った。

娘は部屋にいた。ペットのウサギと遊んでいた。

僕は手を振って前を通った。娘は手を振って返した。玄関で靴を履いた。娘が、ウサギを連れて行くかと訊いていた。妻が、ペットを飼える所に引越せるか分からないと答えた。娘は、やだ！おいていけない、と言った。大声で泣き出した。

家を出ると夕日だった。近くの公園のベンチに座った。このベンチで娘とケーキを食べた。ケーキを買うとき、娘は楽しそうにショーケースを覗き込んだ。娘のケーキを、食べさせてと言った。娘はぼんやりと見ていた。少し食べた。娘は黙っていた。突然、泣き出した。いっぱい、いっぱい食べるのと言った。

小さな砂場がある。娘は、よちよち歩きの頃、あの砂で城を作って遊んだ。

砂場の横に鉄棒がある。少年が逆上がりをしていてた。もう少しでできそうになる。何回やっても途中で止まってしまふ。

僕は少女の顔を思い浮かべていた。何年も前、テーブルに頼杖をついて、少し横を向いた、髪を短く切った少女の顔。その顔はぼやけていて焦点が合わない。名前さえ思い出せない。

妻と暮らし始めた頃、休日の昼下がりがりだった。僕は寝そべってテレビを見ていた。妻がコーヒーを持ってきた。僕は、テレビを見ながらコーヒーカー

ップに手を伸ばした。妻が僕の顔の前になにかを差し出した。写真だった。何年も前、アルバイトで一緒だった少女の写真。僕はその写真のことなど忘れていた。僕は懐かしくて写真を見詰めた。

いつどこで撮ったのかも思い出せなかった。僕は顔を上げた。妻は写真を見詰める僕をじっと見ていたらしい。僕はどこにあったのか聞いた。学校

の卒業写真が入っていた袋にあったと言った。

少年は何回も逆上がりを繰り返した。そして成功した。少年は一回転し終えた鉄棒で自慢げだった。

少年は僕を見て笑った。夕日に包まれていた。

僕は少女の名前を思い出した。あの時、妻が写真の裏に書かれていた名前を読んだ。好生さんっていうんだ。妻は僕に顔を近づけた。ねえ、私に似てると思わない？ そう言って笑った。